

# 中央家畜衛生通信

第105号 令和6年9月発行 岩手県中央家畜保健衛生所・岩手県中央家畜衛生協議会

## 目次

- 子牛の感染症はワクチンと良好な環境づくりで予防しましょう！！ …… 1
- 鳥インフルエンザの防疫対策のポイントについて …… 2
- 管内公共放牧場における牛のデルマトフィルス症の発生と対策 …… 3
- 円滑なBSE検査にご協力ください！！ …… 4

子牛の感染症はワクチンと良好な環境づくりで予防しましょう！！

大家畜課

### ●適切なワクチン接種

子牛の感染症(下痢や呼吸器病)の多くは、ウイルス感染により起こります。

ウイルス病は治療がないため、十分な免疫を獲得させるためには生まれる前から準備が必要です。

子牛は、初乳を飲むことで、母牛から免疫(移行抗体)を獲得します。十分な免疫を獲得できるよう、分娩前の母牛にワクチンを接種しましょう。



• ワクチン接種はかかりつけの獣医師にご相談を！！

### ●ストレスの軽減

子牛は、寒暖差等のストレスや飼養環境の悪化により感染防御機能が低下します。牛群の変更はストレスとなります。特に導入牛は新しい環境に慣れるまで、3週間は既存の牛群から隔離し、体調の変化に注意しましょう。また、糞尿の処理を怠ると、アンモニアガスにより、気管の粘膜が荒れて、感染しやすくなる場合があります。敷料交換はこまめに行い、牛にとって快適な環境づくりを心がけましょう。

### ●保温・換気対策

子牛は温度変化に弱い動物です。寒くなってきたら、隙間風を防ぎ、寝床には乾いた敷料をたっぷり入れましょう。濡れた牛床は腹を冷やし、体調を崩す原因になります。

**また、保温も大事だけど換気もとても大事です!!**

朝一番、牛舎で目がチカチカするのは、牛舎内にアンモニアガスがたまっている証拠です。結露は湿度が高い証拠です。子牛に直接風が当たらないように、牛舎の上のほうを開けるなどして、適切に換気しましょう。



- 1 清潔で乾いた牛床
- 2 隙間風を防ぐ
- 3 牛舎の上のほうを

開けて換気

# 鳥インフルエンザの防疫対策のポイントについて

中小家畜課

国内では令和2年以降、毎年、高病原性鳥インフルエンザの発生が確認され、過去4年間の本病の発生状況は、図1のようになっています。

検出されたウイルスの解析により多様な遺伝子型のウイルスが国内に侵入したことが確認されており、野鳥を含む環境中のウイルス濃度の高まりにより、新たな遺伝子型のウイルスが出現する機会が増加し、感染性や病原性が変化する可能性が高い状況です。

令和5年度シーズンは、家きん農場で11事例85.6万羽の発生と、直近4年間で最も発生が少ない年でした。これは農場の飼養衛生管理レベルが向上したためと考えられる一方で、発生農場の疫学調査では、基本的な飼養衛生管理が不十分であり、消毒・更衣等の不備により人を介してウイルスが持ち込まれた可能性や、家きん舎の壁の穴や防鳥ネット設置の不備等から、野鳥を含む野生動物を介してウイルスが持ち込まれた可能性が示唆されており、このことは飼養衛生管理の重要性を示す結果と考えられます。

家きんでの発生は、①野鳥の行動変化や感染状況などの環境要因、②ウイルスの性質（感染性、病原性の強さ）、③飼養衛生管理の対策状況など様々な要因が関与します。情報を注視し、農場での対策を徹底しましょう。

## ● 発生リスクを減らすために（防疫対策徹底のポイント）

- (1) 渡り鳥が飛来するため池等の水場が近い農場は、発生のリスクが高くなります。渡り鳥の飛来が本格化する前の9月中には家きん舎の修繕等の侵入防止対策を万全にし、特に10月から翌年5月までは警戒を強化しましょう。
- (2) 家きん農場における各種対策の徹底
  - ① 入出時対策：消毒・更衣前後における交差のない動線、明確な境界線の確保
  - ② 野生動物対策：農場内の整理・整頓、堆肥舎や鶏糞搬出口への覆いの設置
  - ③ 入気口対策：粉塵・羽毛等対策、野鳥防止策、フィルターの設置等
- (3) 飼養衛生管理基準の遵守状況の一斉点検の実施
- (4) まん延防止対策
  - ① 毎日の健康観察、異状の早期発見と早期通報
  - ② 疾病発生時の円滑な防疫措置に必要な事前準備（埋却地確保等）

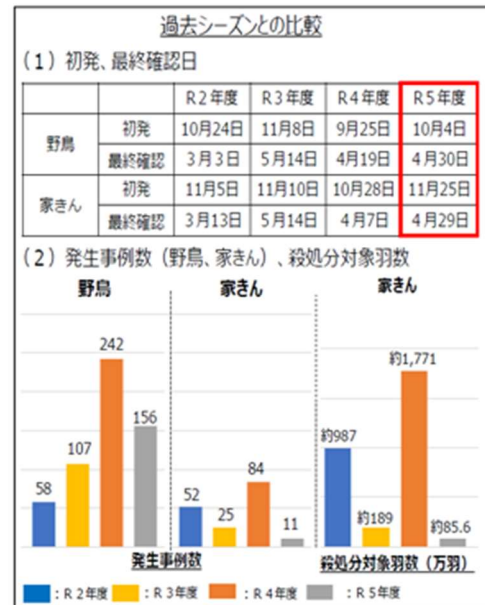


図1 過去4シーズンのHPAI発生状況

ウイルスを家きん舎に侵入させないよう、防疫対策を徹底しましょう。



デルマトフィルス症は、*Dermatophilus congolensis* (*D.congolensis*)という細菌を原因とする伝染性の皮膚病です。

病変は顔面、頭頸部、背部、乳頭、乳房間溝等、湿りやすい部位の皮膚に好発し、次第に全身に広がります。感染動物の皮膚には、多数のかさぶた（痂皮）が形成されます。この痂皮がはがれて露出した赤い湿潤な表皮には、本菌が多量に含まれています。

健康動物の皮膚は、通常は本菌に感染しにくい状態にあります。放牧場のように皮膚が損傷しやすい環境（アブやサシバエ、有棘植物などの存在）において皮膚が損傷を受け、発症牛と接触した場合、感染が成立します。

本症の原因菌が活発化する湿潤な気候で発生しやすく、梅雨時期は特に注意が必要です。また、栄養不足やストレスは感染を促進します。

## 1 発生

本年7月中旬、管内の公共放牧場（350頭規模）において、放牧牛の頭頸部又は全身に多数の痂皮を主徴とする皮膚病が確認されました（図1）。

複数の発症牛の痂皮から *D.congolensis* が分離され（図2）、デルマトフィルス症と診断されました。

最初に確認された時点では、痂皮が認められた牛は放牧牛の約2割程度でしたが、約1か月後には、約7割に同様の症状が認められました。

分離菌は多くの抗生物質に感受性を示し、有効な抗生物質による治療が迅速に行われたことから、多くの発症牛が短期間で回復し、発生は終息に向かいました。

## 2 対策

本症は、病変が似ている皮膚糸状菌症（カビが原因）と異なり、放置して



図1 痂皮の形成



図2 *D.congolensis*

も自然治癒しません。

重症化や牛群内における感染の拡大を防ぐためには、発症牛の早期発見、隔離及び本菌に対して有効な抗生物質による治療が重要です。また、痂皮をはがして、ヨード剤などの消毒薬でこすり洗いすることで、治癒までの期間が短くなります。発症牛に使用した器具（ブラシ等）は感染を拡大させる要因となるので、水洗・消毒してから他の牛に使用しましょう

本菌は人にも感染するため、作業時には手袋を着用するなどの感染防止対策を実施し、作業後は手をよく洗いましょう。

日頃から飼養牛や放牧牛の健康観察を行い、疑わしい症状を発見した際には、速やかに獣医師の診察を受けましょう！

円滑なBSE検査にご協力ください！！

大家畜課

●牛飼養者の皆様へお願い

気温の高い日が続いており、死亡牛の腐敗の進行が速まっています。腐敗が進むと、BSE検査の妨げになるばかりではなく、悪臭の原因となります。

獣医師の検案を受けたら、速やかに保冷库への搬入をお願いします。

●獣医師の皆様へのお願い

- 1 死亡診断書に、**BSE検査の要否を必ず記載**するようお願いします。  
\*死亡診断書は死亡牛の搬送時に添付するようお願いします。
- 2 **BSE検査が必要と判断された牛は**、FAX等で当所に「死亡牛届出書」の提出が必要です。様式例などが必要な場合は、大家畜課防疫担当にご連絡ください。

< お問い合わせ先 >

○岩手県中央家畜保健衛生所

電話：019-688-4111 / FAX：019-688-4012

ホームページ：http://www.pref.iwate.jp/nougyou/desaki/chuuou/index.html

または「岩手県中央家畜保健衛生所」で検索してください

○岩手県中央家畜衛生協議会

電話・FAX：019-688-4015